

# 横浜歌人会 会報 110号

## 01 第二十回横浜歌人会研究会

説経節鑑賞会報告

稲垣紘一

## 03 横浜随想

平尾眞他

## 07 新入会員自己紹介

田村元、渋谷香代子

## 08 津波古勝子著『大嶺岬』歌集評

行動する歌人の言葉の宝庫

真鍋正男

## 09 会員作品三首

出口十三他

## 10 編集後記

### 第二十回 横浜歌人会研究会 説経節鑑賞会

報告 稲垣紘一

横浜歌人会主催の第20回研究会が七月十八日、かながわ労働プラザで開かれた。参加者は41名。今回は「説経節鑑賞会」として行われた。

開会挨拶で平野久美子代表委員は「いくつになっても、知らないことを知る、新しいことを知るのとても嬉しいことです。説経節は全く知りませんでしたので、とても楽しみにしてまいりました」と述べたが、私も同感だった。予備知識もなく、人形浄瑠璃の太夫による「小栗判官一代記」が鑑賞できることにひかれての参加だった。

鑑賞会は第一部で本日の演者・佐渡の人形浄瑠璃・猿八座に所属する渡部八太夫さんから、説経節についての説明と実演(説経をくり「鬼鹿毛の段」)。休憩をはさんだ第二部では、説経祭文についての説明と実演(説経祭文 小栗判官一代記 第26段車引き)が行われた。

〈渡部さんの自己紹介〉

【渡部】「今日はどういうお話をしたらいいかなと思っていました。人形劇をやってくれると思われていたようですが、人形劇を連れてくると何十万円もかかるので、それで単身で乗り込んできたというわけ

です。ごめんなさい…」

「…皆さんは和歌ということで言葉を専門とされて



いる。私は太夫が本職。現代の日本語ではありませんが、古語を扱っていますので、共通のスタンスに立てる部分もあるかなあと、お役に立てる部分もあるかなあと…」横浜歌人会の会報109号で、前会長の手々和さんが、「表現と言葉の原初に踏み込む」とありました。これはすごい…」

等々鍛え抜かれた張りのある声で、時折ユーモアを交えて自己紹介された。

渡部さんは昭和三十四年東京生まれ。八王子在住。この世界に関わるようになったのは、秋川市(現あ

きる野市)の二宮にあつた歌舞伎の復活に関わつたためと言つ。

「…この歌舞伎の復活には多くの学識経験者が参加したが、その中に「説経節の会」のメンバーがいた。…この出会いは、私を歌舞伎の音曲(長唄・義太夫)に引き込んでいただけでなく、説経節にまで入れて込んで、十三代目薩摩若太夫を襲名するまでになった。平成23年、副校長を最後に小学校を退職。人形浄瑠璃「猿八座」の専属太夫、「渡部八太夫」となる。説経祭文だけでなく、広く古説経や古浄瑠璃、又、文弥節の研究を始める。平成25年、芸能歴20年を期して、若太夫を廃業し、渡部八太夫として独立。絶えて再演の無い「古説経」を、より古い浄瑠璃である「文弥節」を使って、蘇らせることに情熱を傾ける。」(ブログから)

〈「説経節」について〉

「説経節は室町時代まで遡れますが、これからお話するのは四百年まえ、戦国時代が終わり江戸幕府が安定して、人々が娯楽の世界も少しずつ手に入る時代になって、説経浄瑠璃、あるいは人形浄瑠璃といったものが出てきます。はじめは京都の四条河原に小屋掛けして、人形を使ったお話を見せるようになって。いろんな話があるが、有名なものでは山椒大夫、苧萱道心、安倍晴明の狐の話で、信田妻などがあります。今日紹介するのは「小栗判官」です。

今年の干支は午。小栗判官の中に鬼鹿毛おにかげというものがあつたので、これを選びました。」

〈鬼鹿毛の段のあらすじ〉

御菩薩池(みどろがいけ)の龍と交わつて勅勘となり常陸の国に流された小栗判官は相模の国の横山正監照元の娘、照手姫のもとへ押し入り婚をしたが、これを恨んだ照元は一計をめぐらした。横山家で飼っている人食い馬の鬼鹿毛を使って小栗を殺そうと計つたのである。しかし、照元の目論見通りならず、小栗が見事に鬼鹿毛を乗りこなす

その様が臨場感豊かに生き生きと描かれている。八太夫さんの古語を流れるように操る語りに魅了させられた。五音、七音の調べの美しさ、三味線(中田惹八さん)の音色が場の雰囲気や弥やが上にも盛り上げる。

以下はをくり御物絵巻・鬼鹿毛の段の一節から。軽快なリズム、劇中の世界を目の当たりにしている

ような心地にさせる、リアルな筆致を味わいたい。横山八十三騎の人々は、今こそ、小栗が最期を見んと、我、先せんと、進めどもこれはこれとは、ばかりにて、物言う人も更になし。三男三郎は、余りの事の、面白さに、十二格(こ)の登り梯(のぼりはし)を、取り出だし。主殿(しゅでん)の屋端(やはな)へ、差し掛けて、腰の御扇(おんおおぎ)にて、「これへ、これへ」と賞翫(しょうかかん)ある。



小栗、この由、ご覧じて、「とても、乗る上、乗つて見せばや」と思し召し。四足(しそく)を揃え、十二格の登り梯を、とつくり、とつくりと乗り上げて、主殿の屋端を駆けつ、返えいつ(返しつ)お乗りあつて、真つ逆さまに乗り降ろす…

第二部 〈「説経祭文」について〉

【渡部】「古説経は、近松門左衛門が出てくる元禄時代以降、ばつたりとなくなつてしまふ。近松では、ついこの間起きた心中事件が舞台にのるわけで、その熱狂ぶりはすこかった。昔の神様の話の説経は忘れられてしまふ。それが千八百年代の幕末に近い頃に、薩摩若太夫という人が出て、歌祭文というのをやつた。祭文というのは、神主さんが祝詞を上げた

り、お寺で行事をやるのに作業手順を書いていた、これを暗誦するのに表情をつけたんではないでしょうか、これが歌祭文とか山伏祭文とか、お話をする祭文になる。昔の説経とは関係はありません。

初代の若太夫さんは歌祭文が得意だったのと、それに合わせて、説経節をアレンジして、これにのせて歌つちやえということをやったんです。これがちよつと流行った。それが多摩地方に残っていて私が薩摩若太夫の十三代目になります。元ですが…。

後半は二百年前に流行った説経祭文というものを紹介しようと思います。

実演は「説教祭文・小栗判官照手姫」から第26段「車引きの段」(薩摩若太夫正本)。

#### 〈物語の概要〉

鬼鹿毛では殺せないと知った横山正監は小栗を毒殺(毒酒の段)し、また、照手姫だけ生かしておくわけにもいかず、相模の川に流した。幸い命は助かるが、ここから苦難の流転劇が始まる。車引きの段は、殺されたが、<sup>がきやみ</sup>餓鬼病(木乃伊のようなもの)としてこの世に立ち戻った小栗判官と照手姫との奇妙な出会いからはじまる。照手姫は餓鬼病が小栗とは知らない。(非業の死を遂げた)夫の菩提のために、ひと引きすれば千僧供養(千人の僧の供養をうけたと同じ)、ふた引きすれば万僧供養といわれる餓鬼病車を引いて照手姫は美濃から琵琶湖畔の大津へ

と旅立つ。

この段は街道沿いの景色を歌い、つぎつぎと地名を詠み込んでゆく道行文。その一節を紹介すると

〜思いのままに轟けば、やれ嬉や嬉やと、涙は垂井の宿を出で。身の本復を松原や、上下五日の旅の空。心はいとど関ヶ原、大関村を後になし、不破の関屋の板庇。月もれとてやまばらなる。姫は古跡を打ち眺め、「おお、その昔、大中臣の朝臣、道盛卿の御歌に、吹き替えて月こそ漏らぬ板庇とく澄みあらせ不破の関守」

掛詞を駆使して巧みに地名を折込んでいる。七五調の調べが心地よい。鬼鹿毛の動とは違った口説きの妙味に暫し聴きほれた。道盛卿の他に大友の黒主の(鏡山いざ立ち寄りて…)の歌も登場する。



終わりに高尾副代表委員が「日本古来の素晴らしい伝統芸能をみることでできましてとてもありがたく思いました。このような貴重な機会を与えて頂きまして会が成功裏に終わったのではないかと思います。」と結んで散会した。



## 横浜随想

### 横浜の歌

平尾 眞

私の散歩コースの一つに生麦のキリンビール工場がある。過般四月に横浜歌人会が吟行をやったところである。そのコース近くに国道駅と生麦事件の碑がある。「国道」とは駅名としてはやや妙だが、第一京浜国道との交点に存在することに由来の正式駅名とのこと。また碑はビール工場の入り口近くにあり、幕末の生麦事件の発生場所を示している。

横浜にはこれらよりもっと知られた名所が結構ある。中区、西区、神奈川区を中心に海側の地域に集中してある。これは横浜が幕末の横浜港開港から現在までほぼ六十年の間に急速に発展した若い都市であることにも因るのである。

ところで歌謡曲(ポピュラー、演歌、民謡を含む)などの世界には所謂「ご当地ソング」と称されるものがあり、横浜のそれは随分と多いような気がする。短歌の世界ではどうか。いや、こんなことで簡単に短歌と歌謡曲の比較をするべきでないことは承知だが、地名や場所名などは人のシンパシーを誘い出しやすく、ご当地ソングもそれ狙いかも知れず、短

歌においてもこのことは同じではないか、と思ったのである。

尤も過去の歌を読むと吉井勇は永代橋、祇園、両国、浅草などと多く詠み、他の歌人にもいくつかはある。だが多くは旅人の目からである。伊藤一彦、時田則雄などは少し違う気もするが住んでいる者の目からのものは少ない。これは私が寡聞でありすぎる故か。

今後、住んでいる者の目からの「横浜」という歌題を立ててじっくり挑んでみたい。

### 小さな靴の物語

高尾文子

「むかしむかしのことでした。名前は小さなエルズニーヤ。ひとりぼっちで死にました。マイダネクは父さんの、アウシユビッツは母さんの、命が消えた場所でした。ひとりぼっちのエルズニーヤ。その子も死んでゆきました。」

この詩は、マイダネクの収容所で死んだユダヤの少女が、靴の中に遺したものであるという。何歳であったのだろうか。どんな思いで書いたのだろうか。極限状態の中で(詩を意識した表現ではないはずだ。父母を殺され、ただ辛く寂しく、国家間の憎悪のこなど何も解らないままに、幼く無垢の真実を吐露したのではなからうか。ここに綴られた言葉を前にして、文学的批評などは空しい。

数年前のこと、アウシユビッツ収容所解放五十年を記念して、広島県福山市に開館された「日本ホロコースト記念館」を訪れた私は、館内に展示されていた小さな片方だけの女兒の靴を見て、深く胸を打たれた。

・ガス室に果てし子の靴十五センチいりけなき片方の靴展示さる

・子の靴の片方いづこに泣いてゐむ死体焼却棟の煙突

・神に似るかたちとほに杳き日つくとふにんげん歩む  
絶滅収容所へ

右の拙詠は、そのときの連作より引いた。この「片方の靴」は、もちろん冒頭の詩の少女のものとは違う。しかし、偶然に遺された二つの小さな靴の物語は、あらためて戦争の残酷さを思わせるのである。

・ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す

・泥濘に小休止するわが一隊すでに生きものの感じにあらす

宮柊二歌集『山西省』より引く。短歌というジャンルを超越するこの歌集は、秀れた戦争文学として高く評価されている。歌集後記には「兵隊は消耗品」と言われた時代であったと誌されているが、克明な戦場描写はそれを証しているだろう。そして日本は

今、「いきものの感じにあらず」と詠われた戦争へと再び傾いている。ホロコーストを経験したはずの民族も、凄まじい戦火の只中にある。歩く未来を断られた二人の少女の靴。その訴えるものに私は思いを馳せずにはいられない。

### ホームレス歌人を覚えていきますか

神谷 由希

観光地、高級住宅地として語られる港町横浜で、寿町の名を知る人は少いかも知れない。名は知っていても、実を知る人は更に少いと思う。二〇〇八年

十二月八日、朝日歌壇に登場した一首〈柔らかな時計を持ちて炊き出しのカレーの列に二時間並ぶ〉を皮切りに、投稿者の居住地が〈ホームレス〉とのみ記された投稿歌が話題を呼び、八首目の入選歌（悲しきは寿町と言ふ地名長者町さへ隣りにはあり）によって、作者が横浜中区寿町に住むと推定された。

寿町は、港湾労働者の「寄せ場」から連続と続く、いわゆる「ドヤ街」である。その街から、鍵持たぬ生活に慣れ年を越す今更何を脱ぎ棄てたのか〈親不孝通りと言へど親もなく親にもなれずただ立ち尽くす〉等の入選歌が次々生まれ、読者の反響も大きく、選者の歌人、永田和宏、佐佐木幸綱の他、高野公彦も言葉を寄せている。そしてジャーナリズムによるホームレス歌人探しが始まった。古くからの元町、新しいみなとみらいの繁盛の陰に、元町に隣りあう

形の寿町は、ひっそりと息づいて来たが、リーマンショックに続く派遣切騒動なども影響して、住人がふくれ上り、野宿のホームレスも増えた時期である。朝日歌壇の「連絡求ム」の呼びかけに、「今は連絡とる気ない」と心えた「ホームレス歌人公田耕一」は、二〇〇九年九月七日〈瓢箪の鉢植を売る店先に軽風立てば瓢箪揺れる〉の歌を最後に、ぷつぷつと消息を絶った。胸を病み医療保護受けドヤ街の柵のやうな一室に居るの一首からすれば、病に斃れたのかも知れない。寿町と言う街は、様ざまな物語を呑みこんで、そして何も語らない。

（参考資料：「ホームレス歌人のいた冬」三山喬）

### きらめく横浜の歌人たち

中川 宏子

横浜に住んで二十数年になる。つくづく横浜の地には優れた歌人が多いと思う。開港以来の洒脱で洗練されたオーラ故に朝日カルチャー教室なども趣味人が集う。

私が注目し続けている横浜の歌人を二人紹介したい。一人は千葉聡さんである。一九九八年短歌研究新人賞受賞作「フライング」の中の一詩「明日消える詩のように抱きあつた非常階段から夏になる」は当時鮮烈で凄いが出てきたと思つたものだ。その千葉さんが去年歌文集『今日の放課後、短歌部へ』を出版した。戸塚高校での生徒との汗と涙と笑いの

ちばさと先生奮闘記とでも言うべきか。千葉聡という歌人は他者を描くのが、とりわけ生徒を描くのがすこぶる巧いと思う。「好きだとは言えないときの」「好き」なのだ。蛍光ペンで書かれた「ばか」は。「三元気か」と訊かれて「はい」と言つてから顔をつくつた K は。生徒達の躍動感や感情の機微の表出の妙である。戸塚高校の五年間を千葉さんは「世界一幸せな物書きでいられた」と感慨を述べている。

もう一人紹介したい歌人は石川美南さん。昔、短歌朝日大学で誌上学生として半年間、一緒した。その後石川さんは北溟短歌賞次席から始まり華々しく活躍していく。第一歌集『砂の降る教室』（二〇〇三年）

に戸塚区の歌がある。「深谷町にハーモニカ隊来る朝の町長のうるはしき朝食」。なんとも愉しげな深谷町の歌である。石川さんには「痛み」を伴う歌はあつてもじめじめしていない。スケールも大きくてあまり地名はでないのだが深谷町は特別な土地なのだろう。「書き終へたるふみ大空へ放ちつつ桜桃せよ桜桃せよ今宵」（同）。これら二人の歌人と横浜の歌人達の作品に学ぶのが目下の楽しみである。

### 野島

土屋 美代子

うらうらに今日咲き満てり戦ひに死をたぐへ来し桜の花は  
葛原 繁

作者の故郷原繁氏は歌集『又玄』で掲出歌 野島

の詞書に「野島の直ぐ南方は旧海軍追浜航空隊跡にして、更に旧航空技術廠跡につづく。我は戦争末期をここに過ごしたりき」と記されている。先ごろ集团的自衛権の行使が容認され憲法第九条の真髓が壊れつつある今、このうたが頻りに浮かぶ。短歌を詠み始めたきっかけは葛原繁氏の初心者のための勉強会との出会いである。晩年の二年ほど頂いたご指導を出発は葛原繁氏であるとつねに大切に思っている。

さて、野島は広重の描いた金沢八景の一つ「野島の夕照」で知られている。狭くなつた湾に夕日が映えて現代の夕照を見せてくれるし、島の貝塚は昔から住みやすい処であつた証であろう。「新編武蔵風土記稿」にその名がある。現在の島は居住地と整備された公園が半々で恰好の市民の憩いの場として利用されている。小高い山の展望台から東京湾を始め三浦半島、房総半島、富士山を望むことができ、横浜に残る唯一の自然海浜には多くの生き物が棲息している。また、明治期の金沢は東京からの行き来を船で出来る海浜別荘地として注目されていた。園内には茅葺寄棟屋根の旧伊藤博文公金沢別邸が解体修復されて黎明期の田舎風海浜別邸建築の遺構として一般に公開されている。こうして、ゆたかな自然と歴史ある野島の地を思い、葛原繁氏のうたを思う時、戦争の無い平和な世の中の尊さをしみじみ思う。



## 歌は世につれ

朝井恭子

鳥取の義妹が久々に遊びに来た。日本画を描く彼女は上京の折には先ず美術館に行くのが常である。だが、今回は違った。「最も横浜らしい所に行きたい」と言う。最も横浜らしい処。さて何処だろう。考えた事もなかった。港はもう経験しているし……。すると義妹は「歌に出てくる丘がいい」と言い出した。短歌に詠まれている横浜の丘など思いつかない。短歌には無関係の義妹も知っている有名な丘。次の瞬間ナンが解けた。歌とは短歌ではなく音符のついた歌なのだ。私達は歌は即短歌と解釈するが、世の中ではそれは常識外のことなのだ。義妹の言う「うた」はかつて大ヒットした流行歌の「港の見える丘」だったのだ。私と義妹は早速出かけた。地下鉄をおり外人墓地の側の細い急な坂道をのぼりきるともう丘公園である。東屋のベンチに腰を下した彼女は無言のままだ。感極まつて、ではなくその反対だと私は理解した。丘から見る湾内は大きな橋が横切り、人工的な印象が強く狭苦しい。海を見ている気分とは程遠いのである。例のヒットソング「港の見える丘」の叙情的な風情はもう残ってはいない。丘公園は開園当時の雰囲気は消し去ってしまったのである。私が初めてこの公園を訪れたのは開園一年後の昭和三十八年だった。二つの文学館も未だなく丘の上には東屋だけがあった。目の前には東京湾がひろが

り海面が輝いている。遠くには沖待ちのタンカーも見えた。あれから五十年が過ぎた。バブル期を経て世の中は変わった。歌は世につれ、短歌も又世につれてである。「変化イコール進歩」と信じた。



## 横浜港と氷川丸

相澤一男

氷川丸が横浜港に係留されたのは昭和三十六年という。当初は修学旅行の生徒を宿泊させたり、結婚式の式場を務めたりしたが、その後大規模な改装工事が行われ、建造当時に近い姿に復元されたのが平成二十年。よき時代の船旅を偲ぶことができるようになった。

氷川丸の竣工は昭和五年。外国に行くには船しか

ない時代だった。多くの豪華客船が建造され、快適な航海をうたって、サービスを競いあった。外洋を行く商船は、時代の花形だったといえよう。

昭和十六年、大戦が勃発、華やかな商船時代は終わった。商船はすべて軍に徴用され、軍艦に改造された船もある。氷川丸は病院船に改装された。広大な戦域に展開した艦船は、やがて戦況の悪化にともない、次々と戦火を浴び、沈没していった。

大戦中、沈められた大型の艦船は一八五隻に及んだという。無論、船だけが沈んだのではない。これらの船が東アジアの広い海域の中で、どこで何時沈められたか、詳細に図示した一枚の絵図がある。海岸通りの日本郵船歴史博物館で、その「遭難位置図」の前に立てば、誰も肅然たる思いに身を正さずにはおれないだろう。

日本商船隊は壊滅したが、大型船の中ではただ一隻、氷川丸だけが残った。戦中は病院船として数々の危機を乗りこえ、戦後は引揚船から始まって、復興の先兵として活躍した。横浜港にあって、氷川丸の優美な姿を眺めながら、その波乱にみちた八十余年を思う時、港の景観はいつそう奥ゆきを増すように思われる。



## 新入会員自己紹介

田村元

「りとむ」、「太郎と花子」に所属している田村元と申します。後藤恵市さんのご紹介で、横浜歌人会の一員に加えていただくことになりました。どうぞよろしく願います。

私は群馬県の新里村（現・桐生市）という赤城山麓の農村の出身で、横浜へは言わば移民としてやってまいりました。大学時代は札幌に住んでおりまして、会社勤めを始めてからは、大阪の富田林、品川、松戸、横須賀などを移り住み、横浜市に引っ越して来たのは、平成二十五年の四月のことです。現在の住まいは、日吉駅が最寄りの港北区下田町というところなのですが、この辺りは今でも緑が多く、かつては下田村という村だったそうで、群馬の農村で育った私としては、どこか親しみを感じる環境で、とても気に入って暮らしています。

下田町に引っ越して来る前は、横須賀の汐入に住んでおり、そこから横浜の馬車道にある勤め先に通っていました。馬車道には六年間通っていましたが、勤務先として六年間、居住地として二年目となりますが、横浜は私にとって、とても関わりの深い街になりました。

横浜で最も思い入れがある場所は、桜木町駅の西側にある野毛地区です。馬車道での勤務の後、しばしば飲みに通っていた街なのです。野毛は、首都圏でも有数の飲み屋街だと思いますが、幹線道路から一歩路地に入ると、チェーンの居酒屋はほとんどなく、小さな酒場が軒を連ねる横丁が網の目のように広がっています。

居酒屋の「大鵬」、「わかば」、「新京」、中華料理の「万里」、「翠葉」、おでんの「あさひや」、立ち呑みイタリアンの「BASIC」など、思い出の店を上げていくときりがありません。残業の後、酒場の暖簾をくぐると、日々のサラリーマン生活の鬱屈も、とりあえずその日の分だけは、薄まっていくように感じたものです。

青ぐらい野毛横浜の坂道の修羅を下る流転者方代

エジプトの太古の夜の饗宴のつづきかと野毛の市よぎりゆく

亡き母よ悔る勿れ野毛市の夜のとどろきに歌一つなす

山崎方代の第一歌集『方代』に、戦後の闇市だった頃の野毛を詠んだ歌が収められていることも、野毛に親しみを感じた一因だったと思います。ハードボイルドな文体が、当時の野毛の活気を描き出していますが、この歌を詠んだ頃の方代は三十代の半ば。

私が野毛で飲んでいたので、三十代前半から半ばにかけてですので、時代を超えた「同世代」として、方代に共感していたのかもしれない。

野毛に方代ゆかりの酒場が残っていないか、いろいろと書物を当たって調べているのですが、なかなか見つかることができません。野毛坂を下りたところにある老舗の居酒屋「武蔵屋」などは、戦後すぐの開業らしく、方代が通っていたとしてもおかしくないと思うのですが、残念ながら確認する方法が見当たらないのです。

### 渋谷香代子

このたび横浜歌人会のお仲間に加えていただくことになりました。平成21年4月からランドマークの前川佐重郎先生の短歌教室に通い始め、月に一度歌会形式の授業の中で今日は0点だったとか今回は何点入ったとか楽しく遊んでおりました。そんなふうにして2年ほど過ぎた頃、日本歌人に在席させていただきました。このあたりから歌は私にとつて遊びとばかりは言えないものとなりました。

自転車を漕いでいてもキャベツを刻んでいても、私の生活に寄り添うルビのように五七五七七のリズムは離れてくれません。先日、中城ふみ子の「わが内の脆き部分を揺り出でて鱭ひれながく泳ぐあかき金魚は」という歌に出会い、胸が熱くなりました。生

涯に一首でもこんな歌が詠めたならと強く思いました。その時、私の心臓のあたりに飛び込んだ赤い金魚は、良い歌が詠みたいと願うたびにプリンと向きを変え、私の見果てぬ夢の中を今もゆうゆうと泳いでおります。



### 津波古勝子著『大嶺岬』歌集評

#### 行動する歌人の言葉の宝庫

真鍋正男

『未来』に所属する著者の第二歌集。六十年近い歌歴を持つ著者であるが、沖縄学研究会や沖縄県人会、平和運動の会など、幅の広い活動も長く続けておられ、心豊かな交わりを通して、教えられ学ぶことも多くあったことが、作品から窺える。

「身の裡に刺を養え」声低くまれに厳しき夜の電  
話に

無技巧の歌も時には◎沖縄のことわざ朱に囲まれて

自らの命にかえて「密約」を刻印したる若泉敬  
砂浜に軍配昼顔咲きみちて苛むころ知る人も無  
く

最初の二首は、若き日に直接指導を受けた金井明彦を偲ぶ歌。三首目の若泉敬は、沖縄問題について、佐藤栄作首相の密使として対米交渉にあたり、核持込の事前通告、通過の権利を要める米国に対し「事前協議」を認めさせ、「核抜き本土並み」の沖縄返還のシナリオを書いた人物。平成六年、秘密交渉の経緯を記した著書を上梓し、沖縄県知事あて「歴史に対し負っている私の重い『結果責任』をとる」との遺書を送り、平成八年、著書の英語版完成校を協力者に手渡した直後、服毒自殺した。恥ずかしいことだが、この一首に出会うまで、私など、若泉敬の名さえ知らなかった。

大嶺うぶんみの岬の崎の崩れおり基地を造ると掘り削られぬ

ドア押して自衛官の前に申請すわが屋敷跡の大嶺へ行くに  
革命を待ちくたびれし詩人たちはや道化の衣を纏えり



ひめゆりの制服白板に吊り下げて千代姉は語る声  
しめやかに

とつとつと証言はじむる老兵の輪姦のくんだり奥歯  
が痛む

人間として、日本人として、当然知っておくべき  
沖縄や近隣諸国の歴史と現状を、いかほど承知して  
いるだろうか。自分の身に降りかからなければ気付  
かず、権力者たちにも都合よく騙され続けてい  
るとすれば、騙される側にも責任はある。作品は、  
無知の罪を鋭く問いかけてやまない、

海に沿う大嶺村は基地となりお爺はふいに潮時しおを  
言いけり

家畑トラクターに潰されき亀甲墓の影さえもなし

絶滅危惧種百をあまると聞きしかど山原やんばらの森に

基地は拡がる

成就することなからむを識るほどに反戦地主の会

へ急がな

作品紹介のスペースはないが、著者は、芸能や工  
芸などにも造詣が深く、エネルギーシユな活動ぶり  
に改めて驚かされる。人間一人が生涯に体験できる  
事柄やめぐり合える言葉の数など、たかがしれてい  
る。『大嶺岬』は、行動する歌人の、未知の言葉がぎ  
つしりと詰まった宝庫であり、歌集を読む喜びを味  
わうことができる歌集と思つ。

### 会員作品三首

ランチより乗り来しパナマの水先人コーンパイプをくはへてをりぬ  
背の高きパナマ運河の水先人キリンビールを美味さうに飲む  
初めての寄港地。パナマでたらちねの母にシャネルの香水を買ふ  
出口十三

結界の小暗き繁みをふはり越ゆ源氏螢の白き光は  
螢追ふしばしの時を現とし水にはひ草にほふ指先  
ひそけくも鳥が羽搏く音を聞く夜更けて聴くなりたる耳に  
長崎厚子

奥丹後琴引き浜の昼深し真砂すりつつ鳴き砂を聴く  
きゆつきゆつと白砂鳴き出づ守らねば消えゆくならむ鳴き砂の浜  
復員の父を迎へし舞鶴港 イージス艦が不気味に見張る  
藤田絹子

点眼に明け点眼に終はる日を庭の木樞は白ふりこぼす

透明な角膜は誰かの生きた証 あかし いつかたまはるその尊きを

子を抱きて去りてゆきたるひとのありわれの目がまだ澄みてゐた頃

荻谷君代

スーパーカブのカウルにひかる水たまり細かい砂を底に沈めて

夏の水澄みゆくばかり存在の息不確かに近々とある

熱源を中心付近に宿しつつものや人らの多い日の暮れ

嗟峨直樹

地も空もダークブルーに塗り籠めて夜は来たれり時よ息づけ

いつか枯るる性いのちのいづみ和泉なるひとを想へば苦にがし夜の葡萄酒ヴァアン

手酌する手の影卓に映りをり旅の終はりの酒肆にしあれば

津金規雄

## 編集後記

・新体制での第二回目の会報を発行することができました。皆様のご協力に感謝致します。

・本年の研究会は説経節鑑賞会で、七月十八日、かながわ労働プラザにて実施されました。参加者は珍しい近世歌謡の世界を堪能しました。

・会報の構成にご意見・ご希望がございましたら、是非とも左記平野あてご連絡ください。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記後藤あてお送りください。会報に掲載させて頂きます。

・新しい振替口座(郵便局)は左記の通りです。

00230-0-52137 名義 横浜歌人会

発行日 平成二十六年九月二十六日

発行人 横浜歌人会 代表 平野久美子

〒245-0066 戸塚区俣野町

1403-11-206

編集人 後藤恵市

〒236-0046 金沢区釜利谷西1-46-6

Tel・Fax 782-8778

address kg4238@n.jcnet.jp